

## 長崎県における肺がん、乳がんの相対生存率

早田 みどり\* 市丸 晋一郎 陶山 昭彦

### 1. 緒言

我が国において肺がんは男女とも罹患率が上昇傾向にあり、がん死亡率第1位を占めている。女性においては近年乳がんの罹患率が第1位を占めるようになり、何れも我が国のがん対策上重要な疾患となっている。今回、長崎県がん登録データを用いて、1985～1997年の肺がん、乳がん罹患患者の相対生存率を求め、生存率の推移を検討するとともに、検診等により診断された偶然発見例と、自覚症をきっかけに診断された症例の生存率を比較した。

### 2. 対象及び方法

対象は1985～1997年に診断された肺がん、乳がんのうち、DCO例、上皮内がんを除く第1原発がんのみとした。診断時期を1985～1989年、1990～1994年、1995～1997年の3期に分け、観察期間を1985～2000年とした。県下の全死亡情報と照合することにより、死亡の確認を行なった。死亡の確認されない症例は観察終了時生存中とみなしたが、住民の県外転出が3%前後と少ないことより、死亡者を生存中とするバイアスは無視できると考えた。

生命表法により実測生存率を求めた。期待生存率は、国立がんセンターが作成した日本人の生命表に基づき、Hakulinen法並びにEderer I法により求めた。肺がん(n=7893)については診断時年齢を0～54、55～64、65～74、75歳以上の4群に、乳がん(n=4183)につい

ては54歳未満と55歳以上の2群に分け、世界標準がん人口を用いて年齢調整を行った。

### 3. 結果

Hakulinen法とEderer I法で求めた生存率に差は認められず、以下、Hakulinen法に拠る成績を示す。肺がんについては、1985～1989年罹患患者では3年生存率 $24.8 \pm 0.9$ 、5年生存率 $19.1 \pm 0.9$ 、10年生存率 $15.2 \pm 0.9$ 、1990～1994年罹患患者の5年生存率は $21.8 \pm 0.9$ 、1995～1997年罹患患者の3年生存率は $32.4 \pm 1.4$ と着実な生存率の向上が認められた。また、検診発見例と自覚症のあった例の比較では、各々の10年生存率は前者が $27.8 \pm 2.3$ 、後者は $10.4 \pm 1.1$ と有意な差が認められた。

一方、乳がんについては、1985～1989年罹患患者において3年生存率 $90.4 \pm 1.0$ 、5年生存率 $84.8 \pm 1.2$ 、10年生存率 $76.7 \pm 1.5$ と、肺がんに比べ高い生存率を示したが、1990～1994年罹患患者の5年生存率、1995～1997年罹患患者の3年生存率をみても生存率の向上は全く認められなかった。また、検診発見例と自覚症のあった例の比較では、5年生存率は各々 $91.7 \pm 4.0$ 、 $84.3 \pm 1.4$ と有意ではないが差を認めたものの、10年生存率では全く差が認められなかった。

### 4. 結語

肺がんの相対生存率は1985年以降着実に向上し、検診発見例と症状のあった症例の10

\*放射線影響研究所疫学部

〒850-0013 長崎市中川 1-8-6

年相対生存率にも有意な差が認められたが、乳がんでは罹患年に伴う生存率の向上並びに検診発見例と症状のあった症例の10年相対生存率にも差は認められなかった。

近年、欧米諸国では、Hakulinen 法に拠る相

対生存率が推奨されているが、観察打ち切り例を無しとする今回のような解析においては、Hakulinen 法と Ederer I 法の結果に差はなく、10年以下の生存率であれば、Ederer I 法に拠る相対生存率で問題ないものと考えられた。

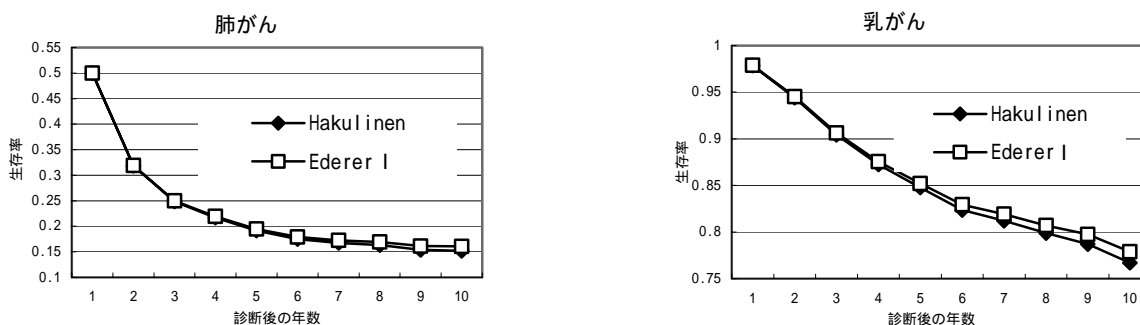


図 1. Hakulinen 法と Ederer I 法による生存率の比較

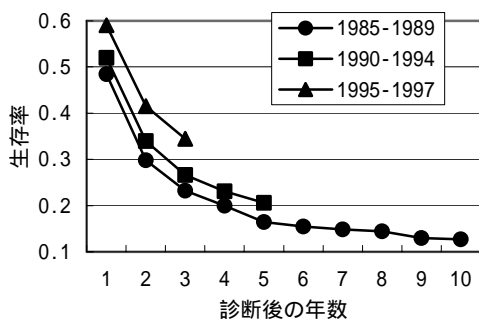


図 2. 肺がんの罹患年別生存率

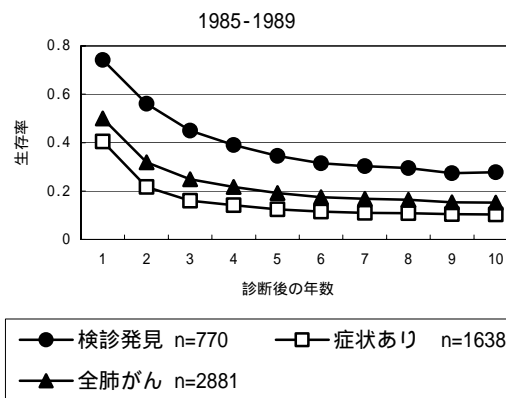


図 3. 肺がんの発見動機別生存率 (1)

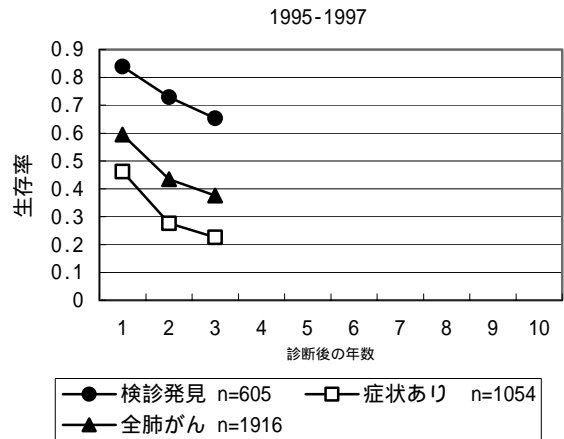
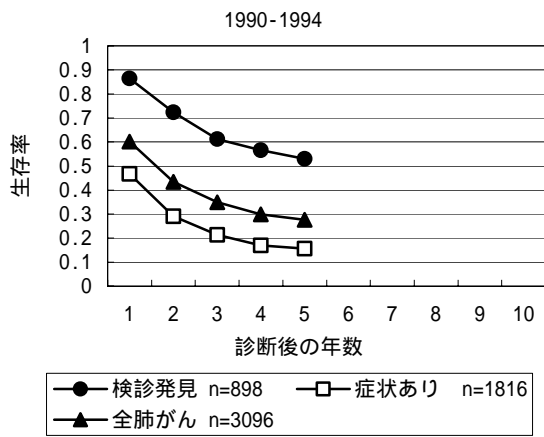


図 3. 肺がんの発見動機別生存率 (2)

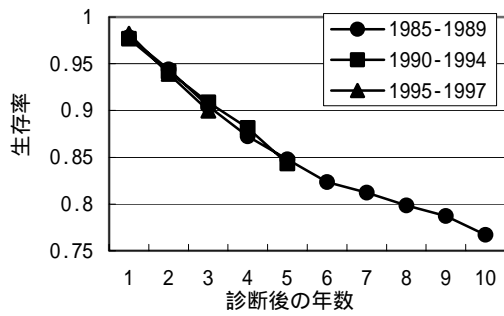


図 4. 乳がんの罹患年別生存率

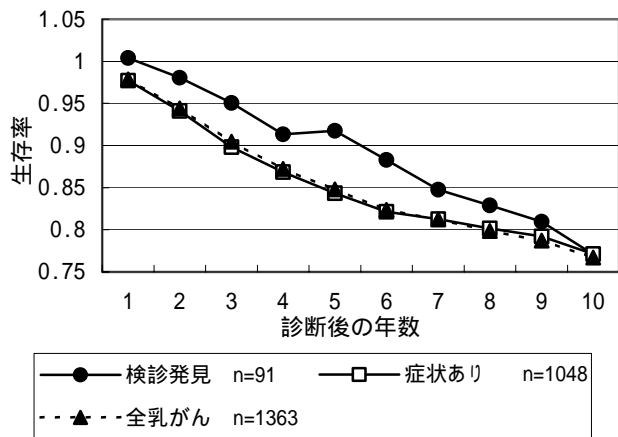


図 5. 乳がんの発見動機別生存率